

タイトル:平成 29(2017)年度 研究セミナー(第 18 回)

日程:平成 29 年 12 月 16 日(土)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「私の博士論文」

岩本佳子(日本学術振興会特別研究員(PD))

「中東☆イスラーム研究セミナー」に受講生として参加した経験の無い私が、錚々たるスタッフの先生方や、これから博士論文を書こうと意気込む前途有望な受講生を前に、「私の博士論文」と称して、ほぼ失敗だらけの私の博士論文執筆過程および己の研究遍歴を話すということは、荷が重いどころか申し訳ないという思いしかなかったが、最初に断ったように「私の事例はあくまで他山の石や反面教師として下さい」という気持ちでお引き受けする運びとなった次第である。

いつものことだが、いざ話し出すとつい余計な説明を入れすぎて話す内容にまとまりがなくなり、また、私の研究内容や博士論文の内容など、そんなウェブに既にあがっている情報を詳しく話しても、歴史学を専攻していない畑違いの受講生には大して面白くなかろうと考え、実際の博士論文執筆および執筆に至るまでの卑近かつ具体的な論点、たとえば留学中の生活や、史料や先行研究の整理方法、やる気が出ないときはとりあえず文献表だけでも作っておけば締切との戦いになる本文執筆の役には立つだとか、雑誌投稿論文や研究発表の内容を博士論文の一章や一節の素案にするだの、研究と生活資金の獲得の成功と失敗、「奨学金」という名の借金には気をつけるのだといったトリヴィアルな話に終始してしまった。さらに、己の所属した京都大学大学院文学研究科西南アジア史学専修の「よく言えば自由、悪くいえば放任ではなく放置」というある種「古典的」な指導体制に起因する様々なエピソード、博士課程時代の己のルサンチマンや恨みつらみ、「己の将来に対して楽観的であることは研究者にとって重要な資質」という指導教員の言葉に己の将来を悲観して飲酒や旅行に走った話などをしていううちに時間切れになってしまい、スタッフの先生方を中心に笑いはとれたものの、これではただの漫談であって受講生の役には全くたななかったのではないかと非常に心が痛い。

最後に、博士論文執筆過程の経験を話すプログラムではあるが、日本の人文・社会学界における博士論文の位置づけが「研究の集大成」から、研究職に就く際に博士号を持っていることが当然というまさに研究者としての「運転免許証」となり、博士論文執筆以後も、長い「ポストドク」時代が続くことを踏まえて、博士論文を提出した後の研究生活にも言及した。博士論文をその後続く長い研究生活の始点に立つための論文と捉え、大きな問題意識や研究課題を意識し、博士論文ですらその中に位置づけ、それを他人に、具体的には科研費の申請書などで簡潔に表明できるように普段から備えておくこと、博士論文の執筆を進めながらも、その博士論文を単著として出版するために、出版社とのツテや具体的な助成制度を見つけておき、そのために周囲の人との円滑なコミュニケーションを日頃から心がけるようにと、己が何一つできていないことを偉そうに受講生に講釈ぶってしまった。受講生の皆様には、今年度の「私の博士論文」を担当したのが私だったことは災難でしかないと思ながら思うが、最初に述べたように、今回の話自体を他山の石として、各々の博士論文執筆や今

後の人生に対する何らかの刺激としてもらったのであれば、生き恥をさらした身としてせめてもの救いである。